

しき疊をば、へりとはいひけんとおぼゆれど、枕草紙に、うげんべりの疊ともみえたり、しかればそれにもかざるべからねど、延喜式等みな端の字を用ひられたれば、へりといへるは後にて、ふるくははしといへるにこそ、式其外江次第、また雲圖抄、類聚雜要など、いづれも端の字を用ひられたり、そが中に式の勘解由に、紺布端茵六枚云々とあるは、いま民間にも用ふるに同じ、又園太曆廿三上、便宜所懸伊豫簾、敷鈍色縁疊等云々とみゆれど、この上文には疊端ともか、せたまへり、

〔貞丈雜記家作〕一疊のへりに縵綱縁と云ふは、白地に色々の糸を以て花などをおり付けたる織物にて、へりをするなり、たとへば赤き糸にて花をすれば、花のまはりをうす赤き色にて、細くへりをととり、又其外は一段うすき色にて、へりをとるなり、其外の色も是れに准じ知るべし、貞丈云く、縵綱は本字暈綱也、暈綱は錦の名也、色々の糸を以て、文を織るなり、文の形は不定なり、暈は日月のかさと云ふ字なり、カサとは、日月の外に、輪かの錦の文の廻りに、同じ色にて、濃き色と、中色と、薄色とをかさねて、三重にへりをととりて織る色、日月の廻りの暈の如くなれば、暈綱錦と云ふなり、畫師の彩色を入るに、官女の衣服の袖口などを重ねたる體をいるどるに、上に重ねたるは色こく、其次は少うすく、其次に猶うすく、次には段々にうす色に、付くるも、うんげん錦に似たる故の事なり、高麗縁は綾なり、白地に文をば黒く織るなり、是も紋は不定雲形菊花など、

其外不定也、白き麻布に黒く文を染めたるは、かの綾を似せたる略物なり、
〔安齋隨筆後編〕十四〕一疊のへり、高麗縁は白地に黒紋を織る也、略るに縵綱縁と云は、赤地に黒黄の二色にて筋を織たる也、厚疊の縁は此二色也、

〔毛吹草三〕山城 安居院アグホシニタ、ヘリ縁高麗ヘリ也、雲

〔茶傳集九〕一疊のへりは、書院廣座敷を二疊一疊半の侘小座敷ニ至ル迄、一寸べり定法也、

〔尤の草紙上〕せばき物之しなく